たなかみ山
第4号
発行
桐生民具クラブ

治山治水　千年のつけ

田上山系と琵琶湖・瀬田川（上）

山本文良

びわ湖も人間と同じように、生まれ育ち、そして生き続けていると言われても中なか信じられません。

実は、それは本当のことなのです。

学者の研究によると、びわ湖は、およそ四百万から五百万年前に地殻変動により、三重県伊賀地方で誕生したのだそうです。

それから、百七拾万から二百万年前に、蒲生郡辺りまで移動。

さらに、百三拾万年前に現在の所にたどりつき、大きさは今の二倍になっていたそうです。

その後、周りの山やまが盛り上がり、びわ湖は反対に沈んでいったのです。

今の大きさに縮まったのは、約一万年前とのことです。

それでは、今のびわ湖はどうなっているのか気になります。

一口に言うと、湖東は沈下、湖西は隆起を続け、全体は北へ向って移動を続けているんだそうです。

全く狐につままれたような話です。

山と平野（へいや）に囲まれたびわ湖には、現在大小あわせて百拾五の河川が流れ込んでいますが、出る川は瀬田川一つです。

このことだけを考えてもわかるように、大雨が降り続いたら、びわ湖の水位は忽ち上昇し周囲の田畑や民家は大変な被害をうけます。

例えば、明治二拾九年九月六日から降り出した雨は拾二日まで続き、中でも七日から八日の二十四時間で彦根の降水量は六百八拾四ミリに達したそうです。

これは、一年間の平均雨量の四か月分に当たり、それが一日に降ったのです。

拾一日には、石山村鳥居川の量水標は三・二メートル以上の増水を記録したそうです。

被害は、死者・行方不明合わせて三拾四名。家屋流出千七百四拾九戸。家屋全壊千三百六拾五戸。床下浸水三万五千五百二拾七戸。被害総額拾七万三千円。現在の金になおすと数拾億円になります。

被災地の中心は蒲生・神崎・犬上・愛知の各郡だったのですが、対岸の坂本村でも全村七百戸が浸水したそうです。

明治の四拾五年間だけでも、実に大水害は拾六回もあったそうです。

この大被害の原因は、まだありません。その犯人は大戸川だったのです。

エッ！　どうしてと疑いたくなります。

大戸川の源流は信楽・田上の山やまです。

この田上山系は、ご覧の通り今も「禿山」で大木は殆ど見られません。

この禿山から流れ出る土砂が瀬田川の川底を浅くして、びわ湖の水の流れをさまたげるのです。

では、どうして田上山系は「禿山」になったのか。

これもよくご存知の通りです。

「あをによし奈良の都は咲く花の薫（にほ）ふがごとく今盛りなり。」と万葉歌人はうたっていますが、あの隆盛の陰に泣いたのは「役民（えきみん）」だけではなかったのです。

建設省のびわ湖工事事務所が作られた「砂防の歴史」等を拝見すると、

○持統八年（一二九五年前）

藤原宮造営のため田上山から桧材等を伐り出し、瀬田川・宇治川・木津川を経て奈良へ運んだ。

○天平勝宝四年（一二三七年前）

東大寺をはじめ奈良七大寺の建立に田上山から用材を伐り出した。

○天平五年～貞観元年

（一二五六年前から一一三〇年前）までの間に、

金勝寺・紫香楽宮・石山寺・比叡山延暦寺・太神山不動寺と次つぎ建てられ、信楽・田上の山やまから用材を伐り出した。

ことが書かれています。

これに対して、和銅三年（一二七九年前）伐木を禁じ「守山戸」を置き山地の保護を始め、万治三年（三三九年前）徳川幕府が、木根堀取禁止及び土砂留・苗木植付を命ずるまでの間も山林の保護に努めているが殆ど

東大寺の大法要

効果はなかったもようです。

更にこの間、田上山系は大部分が花崗岩質でできているため、深層まで風化が進み荒れ放題となった。

こうしたことによって全山「禿山」となり、豪雨の度毎に多量の土砂を流して大被害を繰りかえしてきたのです。

つまり、千三百年前からの「つけ」が今も続いているのです。

親せき付合いと「堺重」

ふれあい村資料館　山本三郎

私たちの住む上田上学区では、昭和二十五年ごろまで親せきや隣近所に冠婚葬祭が行なわれると「堺重」を使っての付合いやお手伝いが残っていました。

しかし、現金収入が主となり物が豊かになるにつれて、その風習は消えてしまいました。

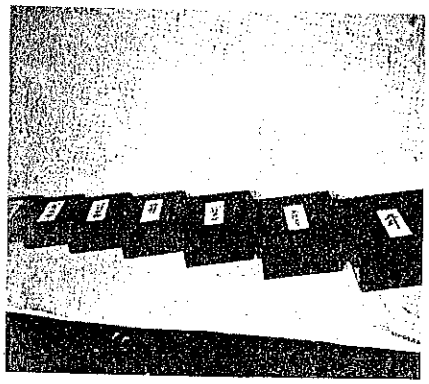
日本の国は、神代の昔から「瑞穂の国」と言われ、農業が国のもとをなしています。

後の世になっても「米商人」「米相場」「千石船」「彦根藩三十五万石」など、米中心の言葉が生まれ使われてきました。

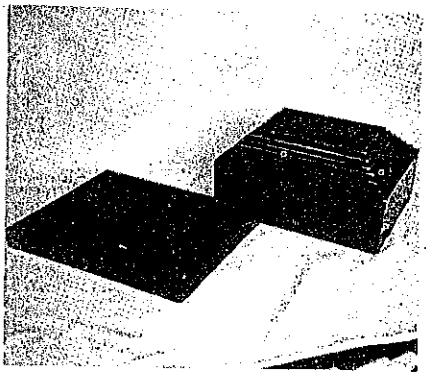
この「サカイジュウ」の語源について町の長老や市の博物館建設準備室の方におたずねしてみますと、いつ、どこで、誰が、どうしてと言うことはわからないが、この器は大阪堺の特産だったようです。

そんなところから漢字では「堺重」と書くとのことでした。

軽い木質。紅の地色に漆仕上げの春慶塗。七種類の量のランク付け。収納に無駄のない大きさ。



七種類のさかいじゅう



さかいじゅうの収納

どれ一つをとっても、さすが大阪商人の知恵の結晶と感心させられます。

現金収入など夢の夢であった農村の人々にとっては、米は財産であったに違いありません。

そこで、祝いごとや不幸が起こると、すぐ「米俵」を荷いで行ったり「堺重」に「笈練り」今日の金封を入れて駆けつけ慶意・弔意をあらわしたのです。

「親せき付合いは、堺重から。」と言ってもよいくらいであり、大切な道具の一つだったのです。

今もお年寄りは、親せきや隣近所に何か起こると「あそこさんは、何升の付合いや。」と、すぐ口にします。

この堺重を出してきて米を入れて確かめてみましたら、

「一升」「一升三合」「一升七合」

「二升」「二升五合」「三升五合」

「五升」はいりました。

出産祝・結婚祝・新築祝・大工見舞・火事見舞・お悔み・年忌法要・さらに、お寺参り・伊勢大神楽祈祷全快祝など親子関係・二親等・三親等その他とお付合いの度合いによって使われ、親から子へ、子から孫へと伝えられていたのです。

また、これに準じたものに「重箱」があります。

春になると「よもぎ餅」。農作業の五月、秋じまいには「ぼた餅」。お祭りには「おすし」。運動会のご馳走。祝い返しの「おこわ」「赤飯」。参詣や加持祈祷時のお供え（米）。

なおまた、お正月が近づくと里の家から「菓子箱」「するめ」「みかん」。そして男の孫には「下駄」女の孫には「こぼこぼ」「張子板」などが届けられました。

さらにお盆にも親元から、家には「菓子箱」「そうめん」。孫には「せきだ」つまり履物をいただくのが例になっていました。

しかし、この頃では「堺重」は殆ど使われなくなり、お金やお酒がこれに代わってしまいました。

地元の副住職さんが、私たちに教え戒めて下さる法話の中に

「文化が進み物が豊かになったことは有難度いことですが、反面人の心はすさみ、自分本位に生きる人が多くなってきました。

私たちは、自分の力だけで生きているのではありません。あらゆるものの恵みによって生かされているのですよ。……」

本当にその通りです。

そう言えば、同じ町内でも「あいさつ」の言葉すら言わない人がいます。淋しく悲しいことですね。

金勝寺裏参道
大鳥居線と小屋谷磨崖仏（火）

山本文良

ＪＲ「石山」で帝産湖南バスの石山・信楽線に乗りかえ約三十五分。「大鳥居」で下車すると、ちょうどそこは十字路になっている。

東へ進むと雲井・信楽方面。今来た道は石山・大津。

南へ橋を渡って急な坂道を登ると、目の前に「大鳥居」の集落が開け、右へ曲がると「田代」へ行ける。

反対の北へ道をとると、山合いではあるが栗東へ出られ石部・草津への近道となっている。

「今では舗装され、自動車がひっきりなしに走っているが、かつては細く険しい山道であり、これが金勝寺への参道だった。」と、さらに、

「この道を十丁ほど（約一km）行くと小川があり、その流れに沿って細い林道を二丁ほど（約二〇〇m）登ると、右側に大岩が見えてくる。

この岩の上に立って西の谷を望むと、また大きな岩が目に入ってくる。

ここへ行くには、谷を下り樹林を抜け、さらに川を渡り岩場をよじのぼるという難所ですぞ。

夏はおろか、冬向きでも案内人なしではとても行けません。

そこに『小屋谷磨崖仏』がありました。」と、地元の大居兵次郎さんは話して下さった。

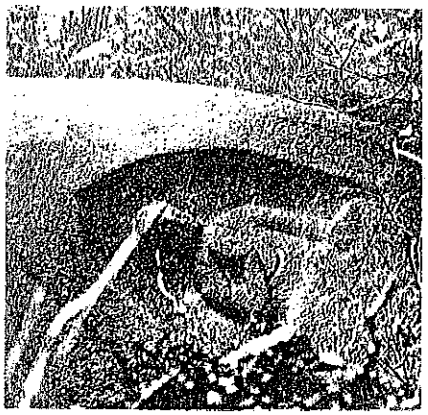
書物によると、一辺が十五・六mの立方体を思わせる巨岩の裾に一・五mの舟型光背を深く彫り、その中に蓮華座を設け、座高一mの釈伽如来像が半内彫りされているとのこと。

さらに、左右の長方形の枠内には童子らしい脇侍の立像があり、上図のように上向きになっているとのこと。

写真で見るだけでも、とても厳かなお姿である。

人も近づけない深い谷。登れそうもない大岩に、どうして仏様を彫ったのかと思わず疑問が湧いてくる。

きっと、何か秘密がありそうな気がする。



金勝山小屋谷磨崖仏

大居さんは言葉を続けて、

「そうです。あの仏様は、上の旧参道にあったのですが、永年の風水害で崖崩れにあい谷川へ転げ落ちたのだと子どものころ聞きました。もったいないことです。」

「今は、山仕事や金勝寺へこの道からお参りする人がなく山道は歩ける状態ではありません。でも、以前はあの道をあえぎあえぎ登って行くと『茶沸観音』の所へ出て、そこで一服。なだらかな尾根伝いに金勝寺へ向かったものです。」

一息ついて「そうねえ……」

「もう地元大鳥居でも、あの仏様を知っている人はわずかでしょう。世の中も、すっかり変わりましたなあ。」と感慨深げでした。

我がふるさと（第三号掲載）
桐生よいとこ一度はおいで…

山本文良

①金銀錦の地場産業は、箔押し・金銀糸製造。

②堰は、オランダ堰堤。

③三田六は、学区最大の惣兵衛さんが創った三田六池。

④逆さは、逆さ三尊仏。

⑤郡誌は、山本栗斉さんが編集した栗太郡誌。

⑥天文は、山本一清博士の田上天文台。

⑦寺の鐘は、元京都北野天満宮の神宮寺の鐘。現在は正休寺所有。

⑧圃場は、圃場整備。

⑨下水は、下水道完備。

⑩ふれあいは、ふれあい村。

溜池からの水落としの歴史

桐生町　山元善彦（善七）

米作りにとっては、水は欠かすことのできない大切なものの一つです。

そのため、昔から田植えの時期になると、農家の人々は雨の降りぐあいをとても気にしてきました。

不幸にして日照りが続き水不足がおこりますと「雨乞い」の行事が村村で行われ、真剣に神様にお願いしてこられたのです。

そうした水不足を少しでも解消するために溜池を作りました。

しかし、この溜池の管理も大変な苦労が伴ないます。

例えば、水の取り入れ・水漏れの看視・排水調節と一年を通じて行わなくてはなりません。

いよいよ水が必要となると、タツミのメを抜いて水を落すのです。この仕事は、大変危険です。

第一、冷たい水中に潜らなくては

なくてはなりません。

第二、タツミの周囲は粘土で固めているため、足がよく滑ります。

第三、メを抜くのに大変な力がいります。

第四、吸われる水のため、大変な圧力がかかります。

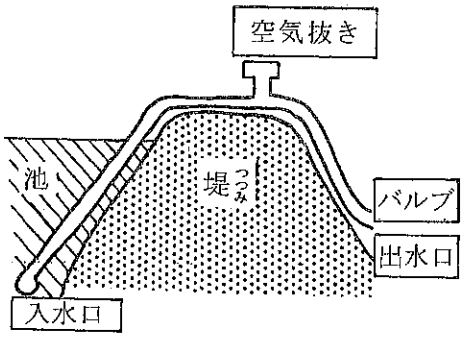
この危険をなくするため、昔の人はいろいろ工夫しました。

まず、メの長さを伸ばして遠隔操作を考えました。

次に、木製のメの変わりにステンレスやゴム板を用いる方法を考えました。

さらに、人力に変わって機械による遠隔操作が工夫されました。

しかし、長年月がたつとキビが腐って役にたたなくなります。



サイホン式給水図

これを防ぐために、キビの部分を木製からビニールのパイプに変えることを思いつきました。

でも、この取り替える工事も大変です。

危険・腐蝕・取り替え・この三つをなくする方法を考え出すことは、とても重要なことであり、農家にとっては必死です。

その結果、「水はパイプの中では、真空状態にすると上る。」というサイホンの原理を利用した水落しを考え出したのです。

単的に言うと、上図のようにパイプを池の底まで差し入れ、地上のパイプの途中に空気を抜く装置を取り付けたものです。

つまり、パイプの中を真空にすると、池の水は気圧によって自然に上ってきます。

さらに、落とした水は勢いがあるため、溝や畦をこわしたり、周囲に飛び散って無駄を繰り返えすことがあります。

これを除ぐため、石やコンクリートの壁、U字溝が使われるようになりました。

また、より効果的な方法としてパイプの先を適当に曲げたり、笠を付けたりして思い通りの方向へ流し出す工夫もされるようになりました。

確証発見！
身を挺して町民を守った逆さ三尊仏

山本文良

「逆さ三尊仏（観音）は、どうして逆さになっているのか。」

きわめて素朴な疑問です。しかし、地元の人でさえわからないのです。

今まで、

1．人が転がした。
2．地震によってすべり落ちた。
3．自然に落ちた。
4．逆さに彫った。

などの説がありました。

石仏の彫られたあの大岩に「のみのあと」が残り、一角が堀削されていることは一見したら誰にでもわかります。

これは「オランダ堰堤」築造のために使われたのだと聞いていました。

しかし、それ以上のことはわかりませんでした。

今回本号の「治山治水千年のつけ田上山系と琵琶湖・瀬田川」について建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所へお伺いしました。

その折り、いただいた資料「ふるさとの田上山を緑に」に、次のように述べておられます。

「ダム用の石を採堀したため背後が削りとられ逆さに倒れた磨崖仏は現在もそのままである。

元の姿にもどそうとする意見もあったが……。」

これで、みんなの疑問は一挙に解決。確証が得られたのです。

あの仏様は、治山治水のため身を挺して私たちを守って下さったのです。いや、守り続けていて下さるのです。

ダム建設時には、いろいろ事情があったのでしょうが、実にもったいないことです。

私たちは、あの仏様の方へ足を向けて寝ることは絶対できません。

いつも感謝の心を忘れてはなりません。唯、合掌あるのみです。

お礼とお詫び

★ご投稿・取材ご協力本当にありがとうございました。

心からお礼申し上げます。

★前回第三号二ページの写真説明で「馬の水遊び」は「馬の水運び」の誤りでした。

訂正してお詫び申し上げます。

桐生民具クラブ代表
山本文良　㊾〇〇七七
有線五六七八